

## 目次

|        |      |     |        |     |    |    |    |
|--------|------|-----|--------|-----|----|----|----|
| 不適切な排除 | 覆面作家 | 大金  | イパネマの娘 | 村   | 確認 | カモ | 幽霊 |
| 211    | 177  | 151 | 123    | 101 | 65 | 35 | 5  |

装幀  
岡 孝 治

写真  
tomiZUM / PIXTA (ピクスタ)  
Dean Drobot/Shutterstock.com  
O.D.O.

覆  
面  
作  
家





幽  
靈

テレビの電源を入れ、ゲーム機のコントローラーを手にしたとき、電話が鳴った。リビングルームにおいた子機の液晶画面には「非通知」の文字が浮かんできたが、私は気にしなかった。私の仕事場に電話をよこす出版社の編集部のうち、いくつかは、発信者番号を秘匿する非通知モードでNTTと契約を結んでいる。かけてくるほうの編集者もそれを知らず、一度指摘したが、「あつ、そうなんですか。それは失礼しました」

で終わってしまった。編集部を使っている電話回線全体に設定されているようで、それが嫌ならこちらの電話機を「非通知発信者拒否」にする他ない。面倒なので、それはしていなかった。「はい」

子機をとりあげ、私は返事をした。ふだんより明るい声でた。

理由はあった。午後五時過ぎというこの時間は本来なら最も集中して原稿を書いている筈なのだが、今日に限って妙に筆が早く進み、五時前に、ノルマである週刊誌連載一本ぶんが終わってしまった。四百字詰め原稿用紙十六枚を、二時間で書きあげるとするのは、三十代、四十代の元気がだった頃のペースで、五十を過ぎてからめっきり執筆速度が落ちたと感じていた私は、スポー

ッで若者を打ち負かしたおとうさんのような気分だったのだ。

夕食にも、ましてや飲みでるのにも時間が早く、それなら時間潰しにと、やりかけのロールプレイングゲームを進めるべく、ゲーム機のスイッチを入れ、テレビのリモコンを操作したところだ。

「○○先生でいらっしゃいますね」

聞き慣れない男の声がいい、私は少し警戒した。つきあいのある編集者なら、私を先生とは呼ばない。つきあいのない編集者は、ここではなく、マネージャーのいる事務所に電話をしてくる。なぜならここの電話番号は非公開で、通常、新規の仕事の依頼は事務所に入る。

「そうですが、そちらは？」

応答したが、「○○先生のお宅ですか」と訝<sup>なや</sup>まず、「○○先生でいらっしゃいますね」と念を押したところもひっかかっていた。私がいるのは、仕事場として使っているマンションの部屋で、確かにここに家族はいない。しかしそれを知っているのは、交友のある人間に限られる。

「名前を申しあげてもご存じないと思いますが、マノと申します」

男はいった。落ちついているが、どこかなれなれしさを感じさせる声だった。

「マノさん」

私はいって、沈黙した。マノという知り合いはいない。

「実は先生に、折りいってお話ししたいことがあります」

「どういうご用件でしょう」

「先生のお仕事のお役に立つ情報なのですが、電話でお話するにはこみいっておりまして……」

「そういうお話でしたら、私ではなく、週刊誌の編集部などにかけられたほうがよい、と思いますよ」

私はいった。小説のネタの売りこみをうけるのは十年ぶりで、しかも一度あったきりだ。私の書いたスパイ小説を読んだ男が、「作品に登場する秘密組織にそっくりの機関が防衛庁（当時）にある。話をぜひ聞いてほしい」と電話をかけてきたのだ。私は断わった。事実だとしても、私に話すのはお門<sup>かど</sup>ちがいで、こちらは嘘<sup>うそ</sup>を商売にしている小説家なのだ。「嘘のような真実」があるのなら、私ではなく、週刊誌などのほうが向いている。電話は一度きりで、その後はなかった。「いえ。この話は、週刊誌なんかでは記事にできません。先生が小説に書いて下さりでもない限り、誰も信じないと思うのです」

「小説にしたら、ますます信じませんよ。小説というのは基本的にすべて作りものですから」  
私はいった。

「しかし先生の作品は、そうとは思えない部分がたくさんあるじゃないですか。暴力団や警察にも詳しいし。きつといいパイプをもっていらいっしやるのだろうと思っているのです」

マノはひっかかる口調でいった。

「そういうのはまったくありません。すべて想像で書いています」

私は答えた。真実だった。しかし多くの人にそう信じてはもらえていない。インタビュにや



ってきた新聞記者にすら、信じてもらえないときがあった。パイプなどない、すべて空想だ、と答えても、「まあまあ、そうおっしゃる他ないのはわかりますよ。取材源は明せないですものね」としたり顔でいわれ、がっかりする。考えようでは、それだけ私が見てきたように嘘を書いている、という証明でもある。ほめられた、と受けとめることにしていた。

「ほう」

マノはいった。

「だとしたら、たいへんな才能ですな」

私は苦笑した。会ったこともない男にそういわれ、怒るというよりはしらけた。たいへんな才能だとは思わないが、少なくとも三十年以上、推理小説家として食べてこられたわけだから、それはこのマノ氏に認められるまでもなく、自分が誰よりわかっている。

「いずれにしても、私はあまりそういうお話で小説を書くことはないんです」

いい加減あきらめろよ、と思いつつ聞いた。だがマノはしつこかった。

「いや、このお話は、先生でないと小説にはできないと思うのです。他の作家の方では書けない」

「そんなことはわかりませんよ。私より才能のある人はいくらでもあります。ただ、こうしてもちこまれた材料を使うかどうかは、人によって異なると思いますが。少なくとも私は、使いません」

断言した。沈黙があった。

「ところでこの電話番号をどこでお知りになりました」

沈黙が不気味なこともあり、私は訊ねた。マノがふっと笑う気配があった。

「簡単ですよ。電話番号を調べるくらいは。私が先生にお話ししようと思っていたことに比べたら」

「そうですか。いずれにしろ、お役に立てなくて申しわけありません」

「あの――」

ようやく弱気を感じさせる口調になって、マノがいった。

「もしどこかで偶然お会いする機会があつて、先生にお時間があるようでしたら、話を聞いていただけますか」

「そうですね。お約束はできませんが、そのときによる、でしょうね」

「わかりました。お忙しいところを失礼しました」

電話は切れた。不気味さが増していた。偶然お会いする機会など、その気になればいくらでも作れるだろう。公開していい電話番号を調べる術があるなら、仕事場の住所だつて簡単に調べられる。外で待ち伏せ、尾行をすれば、どんな偶然も装える。

私は息を吐き、手にしたままの子機で、事務所にかけて。応答したマネージャーに、今かかってきた電話の内容を話し、何もする必要はないが、このことを心にとめておいてくれと告げた。マネージャーは緊張した声になって、

「わかりました。でも、大丈夫ですか」

と訊ねた。

「大丈夫も何も、実害があったわけじゃない」

私はいって笑った。かりにもハードボイルドを書いているのだから、このていどで恐がって、読者に申しわけが立たない。

「だけどその人は、ストーカーまがいのことをしませんかね」

「男だからな。そのケがあるというのじゃない限り、たかが知れているだろう。どこかで待ち伏せられても、それなりに話を聞いてやれば納得するのじゃないのかな」

「気をつけて下さい。といっても、気をつけようがないですが」

「そうだな。まあ、そちらの業務に支障をきたすようなことがなければ大丈夫だろう」

私はいって、電話を切った。事務所ではホームページを運営しているので、そこへの妨害がおこなわれることだけは注意しなければならない、と思ったのだ。

私自身はコンピュータを一切いじらないからそういう心配はない。手で原稿を書く小説家は、年齢的にいって、私が最後になるだろう。私より年長の小説家でも、手書きはごく限られた人々だ。

別に手書きにこだわっているのではない。今から二十年前、当時発売されて間もないワードプロセッサを進呈され、使おうと試みたことはある。だが四百字詰め一枚を打つのに一時間かかり、投げだしてしまった。

いわゆるブラインドタッチができるまで我慢しつづければよかったのだろうが、それよりもさ

つさと書きあげ、遊びにいくことを選んだのだ。

一番の不安は、私の原稿は、出版社が印刷所に入稿する際に、編集者がパソコンで打ち直すというひと手間がかかるため、売れなくなったら即注文が途絶<sup>とだ</sup>えるだろう、ということだ。

以前その話を同業として親しい、ある女流作家にしたところ、

「いいわよ、そうしたらわたしがオペレーターやって打ち直してあげる」

といわれた。しかし彼女は私の十倍は本が売れる超流行作家で、とうてい手間賃を払えないと辞退した。

「大丈夫、そのときはオペレーターの相場でいいから」

もはやお金にはあまり執着がないのか、そう答が返ってきた。私は首をふった。かりにそんなことになれば、それこそ出版社は、殺し屋を雇ってでも、私に消えてほしいと願うだろう。私の小説の打ち直しなどする暇があったら、彼女の小説をもらったほうが十倍、いや百倍よいに決まっている。

剣と魔法の世界を二時間ほど楽しみ、私はいきつけの鮎<sup>すしや</sup>屋で志<sup>しの</sup>乃と落ちあった。志乃は、私がこのところ通っている六本木のクラブのホステスだ。以前からの約束で、同伴出勤をすることになっていた。

志乃とは四年前に、今はもうなくなってしまった別のクラブで知りあった。優しい顔に似合わず、本音をずけずけいう。三十という年齢は、六本木のホステスとしては上に属するが、細や

かでプロらしい応対とすらりとした美脚が気に入っている。

食事をして、そのクラブ「華里」に午後九時に入った。ひとりのときは定位置になっているカウンターに案内され、ヘルプの娘が作ったシングルモルトの水割りを手にした。

三十分ほど過したところで、志乃がマネージャーと呼ばれ、戻ってくるといった。

「今、映文社の乗倉さんから電話があつて、よろしければ邪魔したいって」

「かまわない」

私は頷いた。乗倉は、最近、私の出版担当になった編集者だった。以前は週刊誌にいて、所帯もちだがそれをまったく感じさせない遊びっぷりで、他社の呑んべ編集者たちともすぐに打ちとけていた。酒を飲む小説家が以前に比べて減り、出版関係のパーティのあと、二次会三次会で、複数の社の編集者が呉越同舟で酒場にくだりだす機会が少なくなっている。私は必ずといってよいくらい、そういうときは大人数で飲みに行く。

囲まれて自分がいい気分になれる、という理由もあるが、デビューした三十年近く前は、先輩作家たちがあたり前のようにそうする姿を見てきたからでもある。こうした場では、編集者は編集者で交友を深め、情報を交換するのだ。その機会を提供できる、という自負がある。もちろん飲み代は、各社が割り勘で払うわけで、奢られていい気になっているといわれれば、それまでだが。

十時少し前、私はトイレに立った。「華里」のトイレは、店の奥まった位置にあり、ドアを開けると洗面所、その先に個室ふたつが並んでいる。洗面台はひとつしかない。

個室をでて、手を洗っていると、扉が開いた。男がひとり入ってくる。私は背後を通って個室

に入る男のために、体を洗面台に近づけた。

「○○先生ですね」

男がいい、私は正面の鏡を見た。斜めうしろにノーネクタイでスーツを着ている男がいた。年齢は四十代の初めくらいか。額がわずかに後退していて、サラリーマンにも、そうでないようにも見える、微妙な雰囲気だ。背は私と同じくらいだ。

「そうですか」

水道を止め、ペーパータオルを引きだしながら答えた。飲み屋で声をかけられることはたまにある。ホステスで私の名や顔を知っている女性はまだだが、客の中には読者がときおりいた。

芸能人が飲んでいると声をかけづらいものらしいが、小説家はそうでもないようだ。握手を求められることもある。こちらもそういうときは気どらずに応じる。互いに鼻の下をのばして飲みにきているのだ。格好をつけてもしかたがない。

「夕方、お電話をさしあげた者です」

そういうわれ、私はにわかに緊張した。ホステスとの他愛ないお喋りしやべの向こうに押しやられていた、売りこみ電話のことを思いだした。

私はペーパータオルを丸め、男に向きなおった。

「偶然、というのはこれですか」

向かいあっても、男の正体の見当はつかなかった。クラブでは、さまざまな職業の客を見る。いかにも本職のような風体ふうていをしたカタギもいれば、およそサラリーマンにしか見えない広域暴力

団の幹部もいる。筋者らしい雰囲気<sup>すじもの</sup>を一番まとっているのは、金貸しやカジノ屋のような、いわばフロントの連中だ。

我がもの顔で騒ぐのは、むしろフロントのほうが多い。本職は、意外に静かに飲んでいる。

男はわずかに顔をゆがめた。笑ったのではなく、照れたようだ。

「先生はお顔が売れていらっしゃる。どこかにおられれば、すぐにわかります」

「マノさん、とおっしゃいましたね」

「はい。真実の真に、野原の野です」

「早速、話をしにこられたのですか」

「先生のお邪魔でなければ」

狭い空間で、私と真野はにらみあった。

「残念ですが、このあと編集者が合流することになっていましてね。打ち合わせの用がある。もちろん彼が同席してもいい、というのなら別ですが」

「やめときます」

真野はあっさりといって軽く頭を下げた。店内とつながるドアを開けて、でていく。

私は鏡を向くと、息を吐いた。思ったよりも険しい表情<sup>けむ</sup>の自分が映っていた。四十を過ぎてからは、黙っていると恐そうだ、と人にいわれるようになった。女の子だけではなく、若い新人の編集者にも、初対面のときは恐がられていると感じるときがある。たぶんこんな顔をしているからだろう。